

『大日本物産図絵』と殖産興業政策

浅 野 智 子

はじめに

『大日本物産図会』は明治十年の第一回内国勸業博覧会の出品作品として、三代広重が制作し、大倉孫兵衛が出版したものである。全一五〇版からなる本作品は、日本各地の諸物産の生産工程を描いたものであり、出品作品と同様の作品が博覧会の土産品として販売され、好評を博した。初の政府主催の博覧会は、当時政府が強力に推進していた富国強兵・殖産興業・文明開化の三大政治プロパガンダを結晶化したものであった。これまで『大日本物産図会』は物産図会の一つとして解釈されてきたのに過ぎなかったが、内国勸業博覧会の開催の経緯と出品の背景を調査するうちに、作品の制作の裏に政府の殖産興業政策が影響を及ぼした可能性が浮上してきたのである。

事実、出品目録の決定から依頼までは政府主導で行われていた。また、出版物に関しては、明治九年に改定された出版条例により内務省の認可を必要とし、それは博覧会出品作品といえども例外ではなかった。加えて、鑑賞においても、鑑賞の心得と作品評価の必要性が出品目録の冒頭に記載されるなど、政策としての側面が強く押し出されている。一方で『大日本物産図会』と明治政府の関

連性は、その制作背景からだけでなく、各版の画題と内容が博覧会出品作品と一致していることから伺うことができる。さらに、大倉孫兵衛は当時、報道錦絵を盛んに出版し、民間としてはいち早く海外貿易に進出を始めており、政府との間に何らかの接点を持っていた可能性は大きい。また、その経営理念は政府の殖産興業と一致する面を多く持つものである。これらの事実を踏まえて、『大日本物産図会』が政府の殖産興業の意向に沿って画題を選出され、庶民の意識改革の手段としての役割を担っていたと考えられるのである。

しかしながら、これまで本作品の研究はほとんどなされてこなかった。その理由としては、全一五〇版を完全な形で収めているものが現段階では発見されていないことや、土産品としての性格ゆえに、残された作品の関連資料が極めて少ないことがあげられる。

本論文では、『大日本物産図会』が内国勸業博覧会にあわせて制作された事実に着目し、版元の大倉孫兵衛の活動や明治政府の殖産興業政策の視点から、作品に込められた政治的プロパガンダについて明らかにしようというものである。第一章では三代広重作品としての『大日本物産図会』の姿を捉え、その位置付けを試みる。第二章では当時の大倉孫兵衛の活動から明治政府との接点を探り、さらに内務省と内国勸業博覧会の側面から殖産勸業政策の実態をとらえ

る。第三章では博覧会出品作品の依頼と制作、評価に際しての政府の介入を述べた上で、博覧会が作品に付与した政治性について述べる。これらにより、最終的には『大日本物産図会』に美術品としての面と同時に政策宣伝としての側面も持ち合わせていたことを述べることを目的とするのである。なお、調査の中で『大日本物産図会』が筑波大のほかに国会図書館、船橋市立図書館などにも収められていることがわかった。便宜上各々を筑波大本、国会本、船橋本とする(註一)。

第一章 三代広重と『大日本物産図絵』

画工三代広重

三代目広重は、二代目(重宣)が初代の娘お辰と離縁となり安藤家を去った後、慶応三年にお辰の婿となったが、それまでは一笑斎重政といつて初代の門人であった。入り婿となつてからは二代広重と称したが、実際は三代目である。また初代一立斎の画号、俗称徳兵衛を名乗った。天保十四年(一八四三年)に深川の船大工の息子として生まれ、明治二十七年(一八九四年)三月二十八日、五十三歳で没した。本名を後藤寅吉という。

浮世絵版画の風景画の完成者といわれ、浮世絵六大絵師の一人と称せられた初代広重の門人であったが、初代没年のときはまだ十五歳と若く、門人といつてもそれほど初代の薫陶を受けなかったと考えられる。作画期は文久時代からといわれるが、今回確認された最も古い作品は安政五年のものである。江戸期の作品は初代に似た淡い色彩を用いて江戸庶民の風俗を描くものであったが、明治のなると一変して洋紅の鮮烈な色彩による開化絵を手がけるようになる。同時代の国芳や国輝らに比べ、画質が荒いために美術的な評価は低いが、当時は有数の人気開化絵師であり、制作数は当代随一を誇る。開化絵の作品はいず

れも鮮やかな輸入顔料を多用して西洋文化の新画題を扱い、これまでは専ら、その資料的な価値が高く評価されてきた。しかし、江戸末から明治初期の行政・文化の大変革の中で、いち早く新画材を取り入れた新しい画題を獲得し、成功させた画家としての功績は大きい。次にその作品の具体的な特徴を見ていく。

安政五年(一八五八年)、僅か十五歳の時に手がけた『神奈川台石崎楼上十五景一望之図』(大判錦絵一枚)は初代広重を連想させる淡く情緒的な江戸の風景画であるが、明治期に入ると一転して洋紅(アニリン紅)やベロリン藍といった輸入顔料をふんだんに使った強い色調の赤絵を扱うようになる。三代広重が得意としたのは横浜絵と東京開化絵であり、特に横浜異人館と東京の鉄道の図を多く残している。いずれも現地取材に基づく資料的な価値のあるもので、当時の時事を扱った内容は、単なる絵葉書的な記念絵というよりも即時的な報道性という側面をもっていた。彼が本格的に開化絵師として制作活動を展開したのは明治維新(一八六八年)から明治二十年代半ばまでのおよそ二十五年間であり、最盛期は明治十年までの十年間である。この時期に彼は約六十点以上の作品を発表し、そのほとんどが横浜絵もしくは東京の開化絵である。

画面構成としては、背面に大きく洋館を配置してその前景に人物を配置することが多く、そこでは常に洋装の人物と着物の人物というように新旧・東西文化の対比が展開される。また、当時西洋画の技法の伝播により、洋館図や一覽図には俯瞰的な遠近法が多く用いられたのに対して、三代広重は低いアングルから見上げるように描くことが多く、大判を横に三枚、時には五枚つなげた画面に描かれたそのような風景は、色調の強さともあいまって迫力を感じさせるものである。このような低い視点は初代広重が風景を描く際にたびたび用いた手法であり、広重一門の特徴的画法とも言うべきものである。

三代広重と『大日本物産図絵』

第一回内国勸業博覧会開催の布告が出されたのは明治九年七月十八日であり、翌十年の八月二十一日から十一月三十日まで開催された。筑波大本に納められたもののうち、幾つかに「明治十年八月十日出版」と記載されていることから、本作品の制作期間は約一年だったと推測される。同時に『東京名所三十六景』（大錦三十六枚）を制作・出品しており、あわせて一八六図を短い期間で制作しなければならなかった。『大日本物産図会』は、北海道と千島を組んで一国に扱っているが、その他は一国から二点を選んだ揃物である。北海道から杵岐、対馬まで七五国、計一五〇図になる。一国を上下二段に大錦一枚摺り形式で、中心部で切りはなして横中判の絵を横へつなぎ、折本に仕立てたものがあり、大倉書店の蔵版目録によれば折本は全六冊であった。物産絵の先蹤として知られる江戸期の『日本山海名物図会』（宝暦四年刊）や『山海名産図絵』（寛政十一年刊）、『養蚕秘録』（寛政十五年刊）などから盗用した安易な作画も多く混ざり、正確に時代性を反映しているとはいえない。しかし、本作品が制作された当時、諸産業の近代化への移行はまだ端についたばかりであり、実際に江戸期と大差ない生産技法が用いられていたことも事実で、画中人物の髪型や衣装を当代風に改めている点に、画工の工夫が見て取れるのである。

全七五枚、上下合わせて一五〇枚版に及ぶ大作であり、第一回内国勸業博覧会出品という華々しい肩書きを持つ『大日本物産図会』は、三代広重の代表作と呼ぶに相応しい。しかしながら、その内容を詳しく見てみると、それが三代広重にとって異色の作品であることがわかる。

『大日本物産図会』が製作された明治九年当時、三代広重は数多くの横浜絵や開化絵を出版しており、明治五年には前島密より横浜外国郵便局の開局記念の時事報道錦絵の制作依頼を受けるなど、すでに開化絵の第一人者としての地位を確固たるものにしていた。開化世相を映した新名所絵を手掛けることはそれまでにもあったが、いずれも東京や横浜という限られた地域の西洋化の波が

題材であり、全国諸国を描くということは三代広重にとって初めての試みであった。また、題材も『物産図会』という江戸期の錦絵では扱われることの少なかった新しい画題であり、そこに『大日本物産図会』が三代広重にとって特殊な作品であったのかを窺い知ることができるのである。

それまで高官吏や天皇家の姿を描いたり、生産や労働に携わる錦絵を描くということは、前者は信仰や崇拜の観点から、後者は自国産業の保護の目的から、江戸期にはタブー視されていた。確かに、江戸時代に制作された生産や労働に関する図画として、職人絵や物産図会は存在したが、錦絵や浮世絵においては遊女養蚕図のような見立絵の類や風景画の点画が多く、背景に小さくコマ絵として扱われることもあったがその数は少ない。こうした江戸期の伝統の影響から、各種の取材制限が大幅に撤廃されて画題に広がりを得た明治浮世絵においても、その初期作品では工場内の女性職工の風俗にかつての見立絵に近い潤色が残されていたり、現地での取材を省略して昔の挿画の模写で代用させたりするということが頻繁に行われていたようである。三代広重が『大日本物産図会』の多くの図を『日本山海名物図』などから借用していたことも、短い制作期間という背景に併せて、当時そうした図様の転用が一般的に行われていたという事実があったのである。しかし中には「越中國鉄物細工之圖」や「東京錦絵制作之圖」のように、あらわされた図が当代的な内容であるために、典拠を持たない独自の調査に基づく作品も共に掲載されている。またそれらの多くは、その人物の衣装や扱う文物に西洋化や文明開化の香りを漂わせており、開化絵師三代広重の姿勢が感じられるのである。このように、『大日本物産図会』は三代広重にとって、異例のであると同時に、その中で三代らしさも共存した作品であるのだ。また、同時に出品した『東京名所三十六景』との関係について捉えてみれば、広重の好んだ新旧事物の角逐という構図が見えてくる。しかしながら、浮世絵制作現場において作画に重要な決定権をもっていたのは絵師ではなく版

元であったことから、新旧対比の構図に両作品の版元である大倉孫兵衛が大きな影響を及ぼした可能性が出てくる。そうした背景には、自ら貿易活動を積極的に行って殖産興業政策の一端を担っていた大倉が、制作依頼主である明治政府を意識し、当時政府が推奨していた文物の対比という構図を意図的に表現の中に盛り込んだことがあったのではないだろうか。

第二章 大倉孫兵衛の殖産興業

版元大倉孫兵衛の活動

組合制度の改正や厳しい出版統制の中で、明治初期の書店は、出版から販売、古本や貸本までを扱う混乱の有様で、古参の中には須原屋茂兵衛や和泉屋庄次郎のように旧慣を受け継いだ者や廃業する者が多数あった。その一方で、浅倉屋のように時代の変転に応じて積極的に活動した者や、従来のまま改良発展した者もいた。それらの中にあつて大倉孫兵衛は最大の発展者として称せられることもある。しかしながら、大倉がその後期に出版業から洋紙業・輸出入業に力をいれて成功を収めたことから、これまで初期の出版業が大きく取り扱われることは少なかった。ここでは書店問屋大倉孫兵衛の発展と錦絵出版の姿を取り上げる。

大倉孫兵衛（註二）は天保十四年（一八四三年）三月八日、二代目大倉四郎兵衛の次男として生まれ、名を和三郎といった。父は当時江戸の四谷伝馬町にて萬屋という屋号の絵草紙屋を営んでいた。奉公に出ていた和三郎だったが、文久二年（一八六二年）七月に父が他界すると、家業を継いだ兄の下で働くようになる。またその直後に伯父の養子となり、二代大倉孫兵衛となっている。文久三年、二十歳になった大倉孫兵衛は、噂を聞きつけて、横浜港にて外国人相手の錦絵販売を始め、成功を収める。この時に港で知り合ったのが、後に貿易

商社森村組の創始者となる森村市左衛門その人であった。当時森村は舶来品を仕入れては土佐藩や中津藩などの諸藩や、江戸屋敷などに販売する仕事をしていた。この出会いをきっかけに大倉孫兵衛は国内商品の買い付けと商品開発という重要な部分で森村組の貿易業を支えていく存在となっていくのである。慶応元年には、大倉孫兵衛は兄から独立し、神田今川橋の裏通りに絵草子屋「萬屋」を開業し、同年森村の妹と結婚している。孫兵衛初期の作品には、萬屋孫兵衛・萬孫・萬屋といった複数の商号が用いられ、後期になると大倉孫兵衛もしくは大倉書店の称号が多くの場合用いられている。

独立後、大倉孫兵衛は出版に精力的に取り組み、慶応三年に初の錦絵『騎兵隊歩兵隊散兵大訓練の圖』を手がけている。この作品は、同年一月に行われた日本初の近代的軍隊である「三兵伝習所」の演習風景を題材とし、画工は月岡（大蘇）芳年である。写真入新聞がまだ普及していなかった時代に、時事を扱った錦絵は報道性という大きな特色を持ち、落合芳幾、昇斎一景、囃齋国照といった当時の人気浮世絵師と組んでは、報道錦絵や開化絵を盛んに出版して人気を博していた。初めて三代広重の作品を出版したのは明治四年の、『横浜海岸各国商館図』であつた。上野戦争によって神田の店は奪われるが、東海道の出発点である日本橋に店を移して以降、勝利した官軍の徴収兵が故郷への土産品として錦絵を多く購入していき、店は繁盛した。明治十年前後になるとすでに大倉孫兵衛の店には有数の錦絵版元となり、その店の賑わいを朝野文三郎が日本橋近辺を書いた回顧録（昭和九年）の中から窺い知ることができる（註三）。

大倉孫兵衛と錦絵出版

江戸時代、錦絵はその出版に際して幕府の検閲を受けなくてはならなかった。その手順は、版下を幕府の小吏である絵名主に差し出し、その改め印を得てから初めて彫り・摺りを行って売り出すというものである。維新後もこうした事前

検閲・改め印・出版という構図は受け継がれていくが、明治七年以降は出版法規が定められて、内務省に差し出す事後検閲となり、画面内に発行年月日・画家・出版人の奥付が義務付けられた。こうした従来の慣習の継続の一方で、江戸期には一定数の地本錦絵問屋による板行しか認めていなかった株仲間制度が廃止され、新規事業の自由が広がった。

江戸以来の株仲間制度が廃止されたとはいえ、明治初期では、書店は未だ学術書や錦絵を扱う大手の書店問屋と庶民向けの絵草子屋とに大きく分けられ、専売的特権を持つ書店問屋の中に新興勢力が加わることはそうたやすいことではなかった。しかし、嘉永年間に作られた『問屋名前張』や明治七年の『東京書物問屋姓名記』には見受けられなかった大倉孫兵衛の名は、明治十三年に東京府知事に提出された東京書籍組合の成立願いでは、古組の名門等の有力者と共に、唯一の新興勢力実力者として十一名の出願人の中に連ねられるようになっていく。明治十四年の『東京地本錦絵営業業者組合名簿』や、同年の『地本錦絵問屋仲買小売営業人組合規定』にもその名が記載されていることから、この頃にはすでに錦絵問屋として確固たる地位を築き上げていたことが想像される。さらに、東京書籍商組合の資料によれば、大倉書店の創業日は明治八年（一八七五）年九月十五日となっており、この日を機に絵草子屋から書籍屋に昇格し、屋号も萬屋から大倉書店に改めたことがわかる。また、一九〇三年には、国定教科書の翻刻の取締役となつて一九〇九年まで在任している。義弟保五郎に書店経営を一任した一八八九年以降、大倉書店は落合直文編『言泉』一八九八年、登張信一郎編『独和大事典』等、各種辞典を作るなど、大出版に発展した。夏目漱石の『吾輩は猫である』三冊も、橋口五葉装丁・中村不折挿画でここから出版されている。

明治期には、前述の組合組織の大きな変化と同時に、錦絵を扱う画題も大きな変化を見せていった。現在一般に言われている明治浮世絵は、その画題から

文明開化絵・事件絵・錦絵新聞・諷刺画・美人役者絵・実用版画・歴史画などに大きく分かれ、江戸期のものと比較すると報道性や教科書的な実用性といった面を増したことが特徴として挙げられる。その中で新たに加わった役割として、政府広告としての錦絵がある。明治初年の未だ法律が体系化していない時期には、太政官布告をもって申し渡される法律を解釈し、普及するために、内容を絵解きにして出版している。また、外国からの産業技術の導入や模範的官営工場の設置、博覧会の開催と並行して、建物絵・博覧会絵・工場絵・技術絵といった錦絵が殖産興業政策の一環として内務省や文部省、工部省から発行されている。そうした政府の宣伝的な錦絵の具体的な例が、明治六年のウィーン万国博覧会に出品作品として文部省博物館が編集・出版し、当時の代表的な農工品の製造を図解解説した『教草』である。作者は川上冬崖門下の初期洋画家であったが、政府主導の教化的錦絵作品が殖産興業政策の元で制作された一例として重要な意味を持つ。このように、政策の一環として政府が民間に出版を委託することは、当時多く見受けられたことであった。事件絵とともに、大倉もこうした政府広告的役割をもった錦絵や絵解き教科書を多数手掛けている。

大倉孫兵衛の書籍屋としての成功と時を同じくして、森村市左衛門は上野戦争中に官軍派の物資輸送に携わったことで、明治維新以後にも政府とのつながりを持つようになり、明治十年には森村組としてアメリカへ陶磁器をはじめとする様々な日本雑貨の直接輸出貿易を始めている。大倉も一八八九年には大倉洋紙店を開き、大森と共同で別会社を設立し、中国向けの輸出で成功・発展している。森村の扱った輸出品の中には大倉版の浮世絵も含まれており、その様子を昭和九年に朝野蝸牛が著した『江戸絵から書物まで』（私家版）から窺えるので、一部抄録しておく。

江戸地本錦絵営業組合の設立は幕命を受け寛政十五年松平河内守指導、江戸

名産地本錦絵製造業者をして組合を組織せしめ、明治に至り東京地本彫画営業組合と改称して継続、明治七年築地に現今の商業会議所の前身たる府立商工会なるものを創立し、商工業の發達を期せんが為、提唱者前蔵前工業学校長手島精一氏を推して会長とし、服部直一、山岡某氏など大に努力し、当時組合員の原胤昭氏はキリスト教書を販売するを以て此間に往來し、又洋画家ワクマン氏に洋画の神髓を聴取して感ずる處ありて、組合頭取松木平吉氏を解き日本画家小林清親氏をして、ワクマン氏に就き洋画を研究せしめ、日本版画に一新味を加へ、写生的油絵式の版画に仕上げ、明治九年前後に風景人物などを横絵一枚ものとして数十版出版し、又錦絵カード、卓食掛、ハンカチフに作製し築地居留地バアルンス商会其他に売込、一方銀座四丁目洋服商森村市左衛門氏は外人商館に出入りするを以て視る處ありて、現に内地埼玉、群馬、長野地方などにて正月又は男女児の祝ひに贈答する錦絵の掛軸、天神、武者、美人、各種あり。是れを参照して日本娘と称する美人面を作製し掛軸に作り、之を組合員萬屋孫兵衛氏に託し調製売込み、組合員伊勢辰商店は団扇、日傘、扇子、ハンカチ、各種各様に意匠をこらして照会し輸出に力め此努力は酬ひられて我国版画の美術を、外人は認め賞揚する處となり。海外輸出品の一となりたり。(以下略)

大倉孫兵衛が東京書籍組合に正式加盟したのは明治一四年であるが、それ以前から同様の書籍組合は存在していた。江戸期のそれらは江戸書籍問屋仲間もしくは錦絵地本問屋仲間と称していた。また、明治のものとしては明治五年に設立された東京書籍組合が最初であり、旧地本問屋組合連の中にもこれに加入する者が多かった。この東京書籍組合の組合規則には出版物の輸出に際する心得が記載され、大倉孫兵衛も参加した一四年の地本錦絵営業組合規則の第一条にも同様の規約が記載されている。そこからは、出版物の海外輸出を国家の一

事業として捉えている姿が伺え、錦絵やその他輸出品を扱っていた大倉の姿勢に共通するものとしてその一部を記載する。

我組合同業ハ政府ノ法律ヲ遵奉シ、国家ノ文明ヲ振起シ、教育ヲ旨トシ、且各国輸出ヲ專一ニシ、鴻益ヲ興ス事ヲ謀ルハ勿論、(中略) 簾漏ノ物品ヲ販売セバ、我皇国ノ美譽ヲ害スルニ至ル、依テ組合中ニテ見本ヲ出サバ、其見本違ハサル様ニ注意ス可シ、組合中互ニ親睦ヲ旨トシ、各自不服之所業ナク能ク其産ヲ確実ニシ、以テ世上ノ信任ヲ厚クスル事ヲ要ス

フィラデルフィア(明治五年、一八七二年)やウィーン(明治九年、一八七六年)などの海外の万国博覧会への参加の経験は、政府や識者に産業振興への博覧会の効用を教えるだけでなく、美術工芸品が輸出に有望であることを認識させるものであった(註四)。書籍問屋の組合規則からも同様の輸出奨励の姿が伝わってくるが、明治初期において実際にそうした輸出を手掛けたのは僅か一部の書店のみであった。其の中で大倉の錦絵輸出は、まさにこうした政府の認識を先行して具体化したものであり、若輩ながら精力的に活動していた姿が窺える(註五)。

殖産興業政策と出版

明治維新後、政府は富国強兵・殖産興業・文明開化のスローガンを掲げ、国家単位で急速な欧米化を推進していく。この中で殖産興業は明治七年から十四年の短期間に、軽工業の育成と助長とに任務を限定して集中的に行われた。その端的なものが明治十年から始まる内国勸業博覧会である。この第一回内国勸業博覧会を主催したのは当時の内務省であり、発案者は殖産興業を重視してい

た内務卿の大久保利通であった。

そもそも内務省は大蔵省と民部省を前身とし、勸業寮・駅通寮・土木寮の独立機関として明治六年十一月に設立された。その中で勸業寮は農業と工業を担当する勸農局と、商業と貿易業を担当する勸商局とを持ち、国内の諸産業の保護育成から管理までを担っていた。初代内務卿であった大久保卿は貿易面では官営直輸出政策と貿易商社の保護育成を主張し、国内の産業については早くから国家主体の博覧会開催の必要性を説いていた。その背景には江戸時代の株仲間制度や藩制度といった閉鎖的な産業体制を打開し、産業の情報公開と市場原理による競争、品質の向上を図り、海外貿易に対応可能な国力を育成する意図があった。第一回内国勸業博覧会開催の直接的な契機となったのは、明治九年（一八七六年）二月に大久保内務卿が三条美美にあてた『博覧会開催の建議書』である。其の中で大久保は開催の目的を「万物を遺類なく一場所に蒐集し、素性は質の良否を調し、人工は巧拙を査し、識者之れを評論し、百工相見て互いに自ら奮励し、商売は販路交易の途を開く」と述べている。一般への博覧会開催の布告も同年に行われており、その早急な対応からは、ウィーン万博やパリ万博を経験した明治政府が、国家主体の博覧会の開催を産業面での欧米先進諸国への接近の一手段として最重要視していたことが伝わってくる。

第一回内国勸業博覧会は明治十年、大久保内務卿を総裁として上野公園にて開催された。約三万坪の敷地には鉱業・冶金術、製造物、美術、機械、農業、園芸の部門別に複数の建物が並び、このうち美術館のみが閉会後も永久館として残された。計画や設計は明治六年（一八七三年）に開催されたウィーン万博を模してなされたという。八月二十一日から十一月三十日まで、述べ一〇二日間にわたって開催され、期間中に四十五万人以上が来場した。出品人員は一万六千人以上、出品点数は約八十万五千点にも及んだ。教師の初任給が六円であった当時、政府がこの博覧会の為に十二万円以上という巨費をつぎ込んだこと

からも開催にかかる並々ならない意気込みがうかがえるのである。

このように政府の殖産興業政策は全国からモノを蒐集し、それを分類し、広く国民に展示していくところから始められた。また、博覧会開催に際し政府はさらに比較・評価までも鑑賞者である民衆に要求している。内国博覧会事務局出版の出品作品解説書の冒頭には、この内国博覧会が従来の娯楽要素をもった博覧会とは種を異にし、展示品は「凡そ万象の眼に触る皆知識を長するの媒となり、一物の前に横たはる悉く見聞を広むるの具」であり、「漠然看過して一点の注意なき輩に在ては、数回場に登るとも徒らに心目を娛ましむるに過ぎない」と注意書が記載されている。この「物品の比較如何」とは、物質の精粗を細視熟覧して詳らかにすることであり、製造の巧拙を分かつことであり、使用及び働きの便否得失を計り、時用の適否を知り、価格の廉不廉を考えることに注意することであった。長い間、株仲間制度や藩政によつて産業の比較評価という姿勢が一般でなかった明治初期において、こうした新たな視点の提示は大きな意味をもつものであった。しかし、商社経営者や先進的な知識人の間では早くからその必要性は認識されていた。書籍に関していえば、それは市場の拡大という要因から引き起こされている。明治に入ると開業の自由と印刷技術の向上による出版数の増加から急速に市場が拡大し、従来の江戸の間屋から規定の小売業者へと配信するという、一方向的な商品流通の形は崩れ、地方発信の商品が全国的に流通されるようになる。それにより、店先には諸地域の作品が陳列され、各作品の比較が可能となった。制作の現場においても、名物図会のような地域の比較や、開化絵といった新旧文化の比較、上方錦絵・江戸錦絵という出版地域の比較が出てきた。また、錦絵がその報道性を増したこと、情報への検討も必要であった。明治の書籍問屋はこうした、制作・仕入れ・流通・販売・検閲に関わる各比較や検討といったものを踏まえた経営を行っていた。出版に版元が有力であった明治期錦絵の制作にも、こうした版元の姿勢は大きな影響を

及ぼしたのではないだろうか。

第三章 展示と制作の背景

いわば国家の一大事業でもあった内国勸業博覧会において、展示品の選定や鑑賞に至るまで政府の意図が介入していた事実は、残された資料から読み取ることができる。博覧会の開催の意図が初めて公に示されたのは、前述の通り開催の前年にあたる明治九年七月であった。その年の内務省年報からは、政府が展示品を決定し、各府県知事に出品人の選出を依頼している様子がうかがえる。なお、判読が不可能な文字は□で示した。

太政官明治九年七月十八日第一〇二号を以て、来る明治十年東京府下上野公園内において内国勸業博覧会を行うへきことを一般に告知せり、依て旧地理寮においても木石の類を羅集し以て会場に莊列し少しく人智を裨補する□あらんと故に旧地理頭より各府県に依頼し良材名石を採取して以て之を輸送せしむ而して本局引続て其事を□佳し己に集まる□の品種及□数等左表の如し（表略）（内務省第二回年報三 内国勸業博覧会出品ノ事より抜粋）

右の文章には内国勸業博覧会出品目録表が続いて記載される。そこでは全国を都道府県に分け、さらに旧国名に細分化した地域ごとに、出品すべき石材名と種数が指定されている。博覧会開催と同時期に出版された出品目録から、農産物や工芸品においても土地柄を意識した出品がなされていることから、右の地理寮と同様に各都道府県に各関係省庁より出品の決定と依頼がなされていたと推測される。このように「全国から物を蒐集し、それを分類し、広く国民に展示していく」ことは殖産興業政策の第一歩と明治政府は考えていた。こうした

政府の目は来場者にも向けられ、内国博覧会事務局が発行した出品目録及び解説書の冒頭には「凡そ会場に入るものは人々審査官の気象あるを要す」と、鑑賞者のあり方を規定する注意書きが記載されている。明治十二年に発行された『明治十年「内国勸業博覧会委員報告書」』では、各府県から人が派遣され、農具・耕作法などの展覧内容と有用性を知事に報告している様子がわかるが、ここには冒頭の審査官としての鑑賞者という意識が伺えるのである。しかしながら、多くの民衆は内国勸業博覧会を従来の見世物的な博覧会と同等に理解していた。

「内国勸業博覧会の出品は我も我もと追々持ち込み、高橋由一さんの油絵や両国の与兵衛寿しの額などは上等の部だが、中に置き所にも困るのは、二間もある唐がらしの作り物や九尺もある宝船の菓子などがあり、中に五間もある草鞋や長サ十五間の天秤棒でも出たら何処へ置いたらよいか、取扱ひなさる方もいろいろ気を揉んでいられるといふが、全く御趣意を取違へていたのか」（読売新聞、1877年8月2日）

右に挙げた当時の報道内容からは、従来の博覧会との差別化を図った政府の意図にもかかわらず、新奇さを期待する物見遊山のな来館者の態度が大半を占めていた様子が伝わってくる。こうした傾向は鑑賞者だけでなく、出品者にも共通のものであったことが残された文章よりわかる。例えば、第一回内国勸業博覧会の彫刻の部で師匠の東雲が出品したときの様子を、後に高村光雲は次のように回想している。

政府から掛り役人が出向いて、諸商人工芸家を戸別訪問して、博覧会の趣旨を説き、出品の順序手続きと云った事を詳しく世話して廻るといふと云ふ風

であつたが、勧誘や説明を聞いてゐても、大体面倒臭い困つた事だと思つてゐた。

ここから伺えるのは、政府と出品者との間の意識の微妙なずれである。博覧会出品目録に油絵・彫刻・印刷といった分類がなされていることから、扱う素材の規制があつたことがわかる。表現内容や主題についての細かい規制の有無は不明だが、博覧会の主旨に相応しい内容が求められたことが、右の文章から分かる。けれども実際は、高橋由一や高村光雲といった美術史上に残る作家の出品の一方で、見世物的な作品が多数出品されて人々の関心を集めていたりするなど、政府の意図は十分反映されることなく、従来の要素が制作者や鑑賞者の中に残されていたことがわかる。

工房制作が一般であつた錦絵の製作現場では、人気絵師といえどもその地位は決して高いものではなく、むしろ職人として低く扱われることが多かった。大版元の藤岡屋が残した『藤岡屋日記』の中では、江戸時代に絵師に対して大きな発言権を持っていたのが版元であつたことがうかがえるが、その関係は明治初年も依然として続いていた。むしろ、明治の出版条例によつて、版の所有権が版元に帰属されることが規定され、その関係は一層強まった。このことから、内国勸業博覧会の出品以来を受けたのは版元の大倉孫兵衛であつたと考えられる。

前述の引用文にあるように、孫兵衛も官吏の訪問と博覧会の趣旨説明を受け、それを理解した上で制作を広重に依頼したのである。三代広重を選出した背景に関する文献などは残されていないが、物品の蒐集と比較に主眼を置いた開催目的を踏まえて、新旧の対比を好んだ広重の制作姿勢が何らかの形で評価されるのではないかと推測される。

さらに興味深いことに、『大日本物産図絵』に描かれた諸産業の多くが、博覧

会場の出品内容と一致を見せていることである。中には、第一章で触れた「越中国鉄物細工之図」のように、内国勸業博覧会の出品作品を主題にしていることが詞書に明記されているものもある。また、内国勸業博覧会事務局が出版した出品目録解説の各章の序には、『大日本物産図会』の詞書に類似した、各種の生産工程や生産量などの概説が記載されている。内国勸業博覧会が「全国からモノを蒐集」し、「広く国民に展示」していくことを目的に開催されたように、本作品も「全国の山海の産業」を「そろえて紹介」している。その図解とルビのふられた簡単な詞書きによつて構成された錦絵は、単に作品として鑑賞されるだけでなく、他の展示品によつて来観者の理解の助けとなった可能性がある。しかしながら、大倉がそのような解説書的な作品の依頼を受けたことを示す文献は現在見つからない。

むすび

本論は、物産紹介・産業の変化・機会の行程を知らしめるために錦絵が先行する万国博覧会で用いられたという事実を踏まえて、第一回内国勸業博覧会においても同様の目的を持つて錦絵が制作されたのではないかと指摘し、殖産興業政策の意図を受けた錦絵作品としての『大日本物産図会』の姿を想定するものである。その理由として、版元の大倉孫兵衛の経営理念と殖産興業政策の符合、三代広重の新旧対比の制作姿勢、出品内容と画題の一致を挙げた。産業技術の導入・諸産業の情報公開と比較検討をその大きな目標とした内国勸業博覧会では、新旧の角逐が重要であり、そうした意図を受けて、殖産興業政策の重要な要素である新旧の対比を制作の前面にした可能性は大きい。

第一章では、三代広重の当時の評価を示すとともに、『大日本物産図絵』の画題が三代広重にとっては異質なものであつたことを指摘した。またそれは、開

化絵を得意とした三代広重が江戸時代の諸国物産を描くという制作上の異質さと同時に、物産図というそれまで錦絵で扱われることの少なかった画題の異質さからくるものであることを指摘した。その一方で、新旧の対比を好んだ広重らしさが画面の随所に見受けられることに触れたが、制作にあたって版元の意見が大きく影響した当時、殖産興業を意識していた版元の大倉孫兵衛が政府の産業政策方針に感化されて、意図的に新旧の対比を構築した可能性を述べた。

第二章では「大倉孫兵衛の殖産興業」と題して、版元としての大倉孫兵衛の活動を明治の出版情勢の中で追うと共に、大倉が実践した殖産興業について触れた。

第三章では博覧会にこめられた政府の意図を、開催の背景を通して指摘した。そこで明らかになったのは輸出に対応しうる産業を育成するという殖産興業政策の姿である。万国博覧会を経験して以後、明治政府は、株仲間制度やその他の江戸期の保守的な政策に早急な改善の必要性を感じていた。そうして、閉鎖的な産業形態の打開を情報公開という形式を用いて図ろうとし、その実現の為に、出品作品の決定から出品人の選定、制作の援助や鑑賞方法の規定まで、博覧会の全てを政府主導で行っていたことが残された資料から判った。版元が主導権を握っていた当時の制作現場では、第二章で触れた大倉の経営姿勢が反映されると予想され、それにより、殖産興業的な画題選出になったと推測した。

このようにして『大日本物産図会』が、政府の殖産興業政策と大きな関係性を示した作品であることを指摘した。しかし、そのことはまた、明治時代の出版制度に秘められた政府の能動的な関与というものを浮き彫りにするものでもあった。江戸時代まで、幕府が行ってきた検閲などの出版統制は、その儒教的な意味合いが大きいものであった。しかし、明治期のそれは政府のプロパガンダ的な要素を多分に含むようになる。そこには政府宣伝としての出版利用の意図がうかがえるのだ。そのことは、先に挙げた政府広告としての錦絵の出版

や、政府新聞の発行、反政府的な言論の規制などから読み取れる。またそのことは同時に、西洋文学に触れる中で、娯楽や教訓の手段として位置付けられてきた出版物が、その意義を見つめ直され、新たな意義を獲得していったことをも示している。このように単に出版制度だけでなく、出版そのものの意味合いが変化した時期の作品としての『大日本物産図会』は、当時の政府・版元・画家の新しい関係を捉えるのに有効であるといえる。

現在、明治期浮世絵の美術史における位置付けは未完成な状態である。しかし、この時代は、従来の美術が、殖産興業や富国、国民教化といった様々な目的に添って利用され、重要な役割を果たした時代である。また、当時の作家の多くが、現在その評価を待っている。三代広重も、当時最多の作品数を制作したのにも関わらず、その作品の質の問題から、これまで美術史での評価されてこなかった。しかし、その制作を紐解くと、多くの公的作品を請け負うなど、美術と政治の関係を示していた。同様に、版元の大倉孫兵衛の活動も、企画者と制作者というこれまであまり公に語られることの少なかった美術作品制作の一面を象徴するものであった。作品・文献の不足など、多くの障害をはらんでいるが、こうした明治期の美術研究は日本の美術史を考える上で重要であり、早急に研究されるべきものである。

参考文献

- ・『大日本物産図会』（筑波大本）大倉孫兵衛版、三代広重画、1877
- ・『大日本物産図会』（船橋本）大倉孫兵衛版、三代広重画、1877
- ・『一立斎広重 浮世絵集成 大日本物産圖會』（国会本）光彩社刊、1979
- ・『製陶王国をきづいた父と子 大倉孫兵衛と大倉和親』砂川幸雄著、晶文社、2000
- ・『彌吉光長著作集 第三巻 江戸時代の出版と人』彌吉光長、日外アソシエーツ、1982
- ・『彌吉光長著作集 第四巻 明治時代の出版と人』彌吉光長、日外アソシエーツ、1982

- ・『明治十年 内国勸業博覧会出品解説 第三区美術』内国勸業博覧会事務局印、1877
- ・『明治十年 内国勸業博覧会出品目録』内国勸業博覧会事務局印、1877
- ・『明治百年史叢書 内務省史』第三卷、大蔵会編、原書房、1980
- ・『内務省年報・報告書』第四卷、第五卷、大日方純夫・我部政男・勝田政治、三一書房、1983
- ・『近世歴史資料集成 第二期 第1巻 日本産業史資料(1) 総論 日本山海名産図絵、日本山海名産図絵、桃洞遺筆、肥前州物産図考』、浅見恵・安田健、科学書院、1992
- ・『近世歴史資料集成 第二期 第3巻 日本産業史資料(3) 養蚕秘録、綿布要務、綿花培養新論、機械集編、製茶圖解、朝鮮人参耕作記、椎茸製造獨按内、製葛録、砂糖製作記、紙漉重寶記』、浅見恵・安田健、科学書院、1991
- ・『幕末明治開花期の錦絵版画』樋口弘、味燈書屋、1943
- ・『博覧会の政治学』吉見俊哉、中公新書、1992
- ・『浮世絵辞典』全3巻、吉田映二、画文堂出版、1965
- ・『横浜浮世絵と近代日本―異国“横濱”を旅する―』、神奈川県立歴史博物館、1999
- ・『浮世絵の基礎知識』、吉田漱、雄山閣出版、1974
- ・『明治開化の錦絵』、国立資料館編、東京大学出版、1989
- ・『資料による近代浮世絵事情』、永田生慈、三彩社、1992

註

- 一、筑波大学には全七五枚一五〇図の錦絵のうち、三二枚六四図が宮本文庫『大日本物産図会』として収蔵され、筑波大学以外には、船橋市立図書館に九〇図、国会図書館に一一〇図納められていることがわかつている。本論では便宜上、各々を筑波大本、船橋本、国会本とする。このうち国会本は、一九七九年(昭和五四年)に光彩社から復刻版として出されたものであり、一版を大判サイズに拡大カラーコピーしたものである。筑波大本は大判錦絵の形で袋とじにされ、船橋本は上下二版を中央の目安線に従って切断し、

読み本形式に横につなげている。版の収蔵形式は順不同であり、本来どのような形で出品されていたかを現存作品から知ることはできない。

- 二、大倉孫兵衛の一族は衛生陶器のTOTO、タイルのINAX、磚子の日本ガイシブラッグの日本特殊陶業、洋食器のノリタケ、高級磁器の大倉陶園など、現在まで続く数々の企業を創始した。

- 三、朝野文三郎 回顧日記より

「(日本橋の)川岸は全部倉庫で、通一丁目の角が瀬戸物店、津園いて大倉書店、萬孫絵草紙店、いつも店先は錦絵の見物でいっぱい。絵草子に見とれて懷中を抜かれて青くなる人もあった。その隣が筆墨硯の老舗梅園、黒江屋塗物店、その四、五軒先に地方まで響きわたっていた当時一流の須原屋大書店があった」

- 四、この時出展の準備作業から報告書製作までを取り仕切った博覧会事務局員の佐野常民氏は、一八七五年に刊行した意見書の中で、一八七六(明治九)年のフィラデルフィア万博への参加後、八〇(明治十三)年に日本初の国家的な博覧会の開催を開くべきことを提案している。

- 五、書籍屋に昇格した当時(明治八年)、大倉は三十二歳であり、第一回内国勸業博覧会開催時は三十四歳という若さであった。

- 六、内国勸業博覧会事務局発行の『明治十年内国勸業博覧会出品解説 第三区 美術』一四一頁〜一四九頁 制厥の部の中、一四四頁に出品人として大倉孫兵衛の名あり。

「書本

通一丁目 大倉孫兵衛

品類 源氏五十四帖 落合幾次郎、明治八年六月出版 東京名所三十六景 安藤徳兵衛画、明治八年十一月出版 大日本物産図会 大倉孫兵衛編、安藤徳兵衛画

また、同書内には右の三冊を合わせて三千円で販売されていたことが記載されており、他の出品作品が百円代前半を中心に販売されていたことを考えれば、この価格は当時としては破格の値であったことがわかる。

△三代広重 作品一覽V

神奈川台石崎楼上十五景一望之図	安政五年	一八五八	東京高輪真景蒸氣車鉄道之図	明治六年	一八七三
江戸名所 寿留賀町	安政五年	一八五八	東京横浜鉄道往返之図	明治六年	一八七三
幼童遊び子をとろ子をとろ	慶応三年	一八六七	東京名所之内 新橋ステーション蒸汽車鉄道図	明治六年	一八七三
夕涼市中の賑ひ	慶応四年	一八六八	河原崎座開業諸俳優乗込図	明治七年	一八七四
東京名勝図会 高輪英吉利館	明治元年	一八六七	横浜名所図絵 野毛山下蒸氣車	明治七年	一八七四
同 海運橋通り坂本町	同年		横浜野下伊勢山從海岸鉄道蒸氣車之図	明治七年	一八七四
同 日本橋御高札	同年		東京名勝図会 金杉橋より芝浦の鉄道	明治七年	一八七四
東京府鉄砲洲明石橋之勝景	明治元年	一八六七	同 よし原五勢楼金瓶楼	明治七年	一八七四
東京府鉄砲洲異人館之図	明治二年	一八六九	東京名所之内 六郷の鉄道館	明治七年	一八七四
東京名所 人形町通為替会社繁栄之図	明治二年	一八六九	兔ばえ(冤飼いの流行)	明治七年	一八七四
東京繁栄流行の往来	明治三年	一八七〇	東京名所 從日本橋北之通瓦斯燈夜之景	明治八年	一八七五
横浜商館 天主堂之図	明治三年	一八七〇	東京第一名所 永代橋之真景	明治八年	一八七五
横浜海岸通之図	明治三年	一八七〇	東海名所改正道中記 汐留鉄道館 新橋品川迄一リ九丁	明治八年	一八七五
横浜波止場ヨリ海岸通異人館之真図	明治三年	一八七〇	同 蒸氣の待合 神奈川程か谷迄一リ九丁	明治八年	一八七六
武陽横浜浅間山ヨリ異人館市中之一覽	明治三年	一八七〇	東京名勝図会 江戸橋郵便局(三菱の荷蔵)	明治九年	一八七六
横浜各国商館繁栄図	明治三年	一八七〇	東京名所 荒布橋ヨリ五橋一覽之真図	明治九年	一八七六
横浜海岸各国商館図	明治四年	一八七一	東京諸官省名所集(警察庁・第一国立銀行・開成学校)	明治九年	一八七六
横浜三番商館繁栄之図	明治四年	一八七一	報知新聞追奥羽御巡幸図会 函館港烟火天覧図	明治九年	一八七六
現如上人北海道巡經錦絵余市早発	明治四年	一八七一	同 函館港開拓使庁門飾之図	明治九年	一八七六
東京横浜名所一覽図絵	明治五年	一八七二	大日本物産図絵	明治十年	一八七七
横浜新地蒸氣車鉄道之真景	明治五年	一八七二	東京名所三十三景	明治十年	一八七七
横浜郵便局開業之図	明治五年	一八七二	筑地海軍省於 操練場風船御試之図	明治十年	一八七七
東京汐留鉄道館蒸氣車待合之図	明治六年	一八七三	東京名所 常磐橋内紙幣寮新建之図	明治十年	一八七七
			筑摩県博覧会	明治十年	一八七七
			荒布橋從江戸橋之真図	明治十年	一八七七

西京神戸之間鉄道開業式 諸民拜見之図	明治十年	一八七七
生徒勉強東京小学校教授雙録	明治十年	一八七七
東京馬喰町三街中屋旅亭開業図	明治一二年	一八七九
米国前大統領グラント公市中遊覧日本橋大國旗壯觀之真図	明治一二年	一八七九
久松町劇場久松座繁栄図	明治一二年	一八七九
東京名所八千代洲町 警視庁火消出初階子乗之図	明治一二年	一八七九
東京名所 銀座通朝野新聞社盛大之真図	明治一三年	一八八〇
同 日本橋区浜町魚市場川魚商社繁栄之図	明治一三年	一八八〇
同 京橋通之真景(読売新聞社)	明治一三年	一八八〇
府県名所図会 信濃上田の学校	明治一三年	一八八〇
同 函館支庁	同年	
同 豊後佐賀関	同年	
同 上野富岡製糸場	同年	
同 横浜いせ山の景	同年	
同 肥前長崎大浦	同年	
東京上野公園地 第2内国勸業博覧会開場之図	明治一四年	一八八一
東京名所 上野公園内国勸業第一博覧会美術館并噴水器之図	明治一四年	一八八一
東京名所之内 銀座通煉瓦造鉄道馬車往來図	明治一五年	一八八二
東京名所 鉄道馬車往復上野公園山下之図	明治一五年	一八八二
古今東京名所 元筋違万代ばし(租税寮)	明治一六年	一八八三
古今東京名所 外桜田陸軍参謀本部	明治一六年	一八八三
古今東京名所 飛鳥山公園地王子製紙会社	明治一六年	一八八三
東京開化名所 大手町大蔵省	明治一七年	一八八四
小学教育大日本名所図会 長崎港	明治一四年	一八九一
同 新潟港之図	同年	

同 西京四条鉄橋	同年
同 大阪高麗橋	同年
日光中禅寺大黒天浅草寺開帳の図	明治期
横浜海岸異人館之図	明治期
横浜本町海岸通り仏郎斯役館之図	明治期
横浜吉田橋ヨリ伊勢山太神宮遠景	明治期
駿河三保松原(輸出茶箱の広告)	明治期
地本錦絵双紙団扇問屋 萬屋林吉蔵	明治期
東京府下名所尽 四日市駅通察	明治期
立斎漫画	不明

*印は大倉孫兵衛版によるものである。
 *二〇〇二年現在までに確認されている三代広重作品。
 *同名であっても異なる時期に出版された作品がある
 *画題は記載された本や所蔵館に則した。

『大日本物産図絵』画題総覧

『大日本物産図絵』面題総覧																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
---------------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

32	近江国浜蚊帖輸出図
33	山城国宇治茶摘之図
34	山城国宇治茶製之図
35	丹波国燧石切出之図
36	丹波国蜂蜜製之図
37	紀伊国蜜柑山畑之図
38	紀伊国北港より輸出之図
39	和泉国堺打物見世之図
40	摂津国伊丹酒造之図
41	摂津国新酒荷出之図
42	淡路国鯛づり網之図
43	淡路国鯛網之図
44	播磨国姫路革店之図
45	播磨国赤穂塩浜之図
46	阿波国藍製之図
47	阿波国藍玉製之図
48	伊豫国峯越鴨捕之図
49	老岐国鯨漁之図
50	老岐国神楽棧にて引揚図
51	大隅国煙草培養之図
52	隅国煙草葉製造之図

船橋本

1 筑前國博多織之圖

2 筑前國鯨漁之圖

3 東京綿繪製造之圖

4 武蔵國淺草海苔製圖

* 画題は所蔵館に則した

* 版の順序については所蔵館に則した

* 国会本は筑波大本に所蔵されていないもののみを抜粋し、納められている順に記載した

* 船橋本は、筑波大本および国会本に所蔵されていないもののみを抜粋し、納められている順に記載した。